

## 9日 金曜

### 伝道者の書



1:1 エルサレムの王、ダビデの子、伝道者のことば。

1:2 空の空。伝道者は言う。空の空。すべては空。

1:3 日の下でどんなに労苦しても、それが人に何の益になるだろうか。

1:4 一つの世代が去り、次の世代が来る。しかし、地はいつまでも変わらない。

1:5 日は昇り、日は沈む。そしてまた、元の昇るところへと急ぐ。

1:6 風は南に吹き、巡って北に吹く。巡り巡って風は吹く。しかし、その巡る道に風は帰る。

1:7 川はみな海に流れ込むが、海は満ちることがない。川は流れる場所に、また帰って行く。

1:8 すべてのことは物憂く、人は語ることをできない。目は見て満足することがなく、耳も聞いて満ち足りることがない。

1:9 昔あったものは、これからもあり、かつて起こったことは、これからも起こる。日の下には新しいものは一つもない。

1:10 「これを見よ。これは新しい」と言われるものがあったても、それは、私たちよりはるか前の時代にすでにあったものだ。

1:11 前にあったことは記憶に残っていない。これから後に起こることも、さらに後の時代の人々には記憶されないだろう。

旧約聖書は大きく3つに分けられ、伝統的に「律法」「預言」「聖文書」とされてきました。この伝道者の書は「聖文書」に含まれます。その中でもこの書は特に「知恵文学」とも呼ばれ、人の視点

にも立ちながら神のみこころを指し示すという内容になっているものです。

伝道者の書は「空の空」というように、一見空しい人生観を語っているようですが、これは後にわかるように、神がないとするなら「すべてが空」であるということです。

神様の存在を信じ、その尊い救いにあずかり、また限りない愛と恵で今も生かされていることは疑いのない事実ではあります。しかし時にはノンクリスチャンの方々がどのように考え、感じ、葛藤しているのかということ、を考えてみるのも大切なことです。

もしも神様とその救いがなければ、このみことばのようにむなしいことを、改めて知って、実際に生きておられる愛の神様に感謝しましょう。

またノンクリスチャンの状態にも心を配り、それを否定するよりも、むしろ愛を持って理解しましょう。またそこから生まれる深い交わりと祈りによって、空しさから希望に変わる永遠の福音を届ける「伝道者」となりましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

